

<b>特集</b> <b>京都</b> 古都の美とまちづくり	<b>Special Features</b> <b>Kyoto</b> Beauty and Renovation of the Traditional City	<b>古都の未来像</b> The Future of the Traditional City
<h2>ひとりひとりが主役のまちづくり</h2>		
<b>平家直美</b> HEIKE Naomi	財団法人京都市景観・まちづくりセンター/ 事務局次長	

### 1—まちづくりと景観

京都におけるまちづくりの状況は、ここ数年で、少しずつ変化してきている。注目すべき点は、地域の住民が改めて、自らの地域に目を向けてきたということである。もちろん、以前から、地域に誇りを持ち様々な活動が活発に行われてきたのは言うまでもない。最近の動きはそれに加えて、地域の課題に継続的に取り組もうとするグル

ープが生まれ、着実な成果を生み出しつつあることだ。

一方、「まちづくり」の意味するものが発展してきた。ここでは、「まち」を、自分が属する身近な地域と考え、「づくり」を継続的に環境を維持する活動の積み重ねであり、心地よい状況を育むことをあわせもつものとする。

「まちづくり」は、まちの資源を生かし、人と人のつながりを深くすることが大切であり、このような努力を京都の人々は、ごく自然に行っていた。京都の人々が、地域に深い関心を持ち、それぞれが出来ることを行い、成文化されていなくとも、町のルールをお互いに守る生活をしてきたことは、そのことそのものが「まちづくり」といえる。まちづくりは、まちの歴史を受け継ぎ、まちの今に関わり、まちの未来を切り開くものだ。だからこそ「まちづくりは終わりが無い」と言われる。

また、景観は、人々の日々の暮らしの状況を総合的に表したものである。景観は、そこに住み働く人々によって育まれる。まちづくりの結果が景観に現れる。美しい景観、京都らしい景観は、市民の日々の生活の維持によって支えられている。まちづくりと景観は、本当に深くかかわっている。景観をこのように捕らえると、住み続けること、住み続けられることが京都のまちづくり、景観にとって、非常に重要であることがわかる。

### 2—まちづくりセンターはサポーター役

財団法人京都市景観・まちづくりセンターは、住民・企業・行政のパートナーシップによるまちづくりを推進するための橋渡し役として、平成9年10月、京都市により設立された。設立目的は、「住民と行政のパートナーシップによる地域づくりをめざし、市民・企業・行政の主体的な取組と協働を推進するための各種事業を行い、もって景観の保全・創造、質の高い住環境の形成など、京都の

都市特性の更なる伸長に寄与する」ことである。

住民が自発的かつ活発にまちづくり活動を行う地域がたくさん出てきて、京都市全域に広がることが、センターがめざす京都のまちづくりの姿である。そのための支援や各種のサポートをするのがセンターの役割と考えている。また、個々の

地域まちづくりが進むためには、まちづくりに関わる様々な知識を有するリーダーが必要である。このようなリーダーの方々に必要な情報を提供するのもセンターの役割だと考えている。センターは、まちづくりに関わる総合的な窓口として、京都のまちづくりのノウハウを積極的に蓄積し、これらをまちづくりに取り組む各地域に情報発信し、住民の自主的なまちづくりが発展するためのサポートを行うことを目指している。

以下では、京都の地域まちづくり活動の事例を紹介する。いずれも、京都の特徴である小学校区ごと(元学区)の地域のコミュニティに依拠した取組であることが共通している。地域の力は、地域に関わる人々の誇りや熱意と具体的な行動の積み重ねによって支えられている。

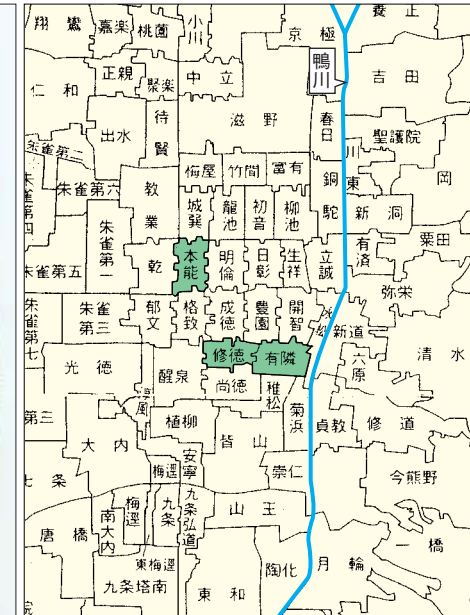
### 3—修徳学区の地域協働型地区計画\*

修徳学区は、京都市下京区の烏丸五条の北側付近に位置している。歴史的には、扇、材木屋など、様々な商工業が営まれる生産と営業の場であった。平成11年3月、地域の将来像を明らかにするため、「わたしのまちに対する想い」と題するアンケートを行った。同年6月には、「修徳まちづくり委員会」を設立した。アンケート結果からは、小学校跡地の計画について高い関心があることがわかった。そこで、小学校跡地における公園整備に地域が主体的に関わることにし、公園整備に関する様々な意見を集約した。特筆すべきは、この過程において、非常に工夫をした取組を行ったことである。

まず、「多数決」による多数の意思は、学区民の総意ではないという基本的な考え方を持った。従って、多数決



■図2—まちづくりのプロセス



■図3—元学区の図

による決定をとってはいない。正反対の考えが、利害関係のある各階層のなかに並存するのは当然であるとして、公園整備に関する各階層(高齢者、子供の両親、近隣町内会、地域の各種団体など)ごとの意見交換会を行い、それぞれの階層の意見を明らかにした。

この後、例えば「子育てのため、子供さんの両親は、遊具がほしいと言っています。もしそれで、芝生のスペースが小さくなくても納得いただけますか?」という問いを各階層に投げかけた。こういう地道な意見交換を繰り返して、最終的には、ほとんどの人が納得する結果にな



■図4—修徳公園計画図



■図1—基本理念



■写真1—地域住民が交代で公園の清掃に携わっている

っていった。お互いの立場を理解していくことを通じて合意形成を図る工夫として高く評価できる。

公園の整備は、地域住民の主体的な参画を得て、3回のワークショップを重ねて計画づくりが行われた。この中でも、様々な課題にチャレンジしている。公園の安全管理で行き詰ったとき、「公園をみんなで守ろう、そのための組織をつくろう」との提案があり、賛同が広がった。公園が完成して以降も約60人の地域住民が交代で公園の清掃に携わっている。

この公園整備の経験が、京都市で初めての「地域協働型地区計画」へとつながることとなった。平成12年11月、まちづくり委員会は、これまでのまちづくりの集大成として地区計画に取り組んだ。平成13年4月には、まちづくりを進める指針として、「修徳元学区地区 地区計画」(方針)が都市計画決定され、現在、まちづくり委員会は次のステップである「地区整備計画」の策定に向けて活動を続けている。

#### 4——本能学区まちづくりのしおり

本能学区は、本能寺の旧跡をはじめ、数多くの歴史的・文化的な資産を有する地区であり、今日に至るまで京染に関わる職人が数多く住む地域である。本能学区のまちづくりは、その立ち上げ方に注目すべき点がある。この学区は、まず有志数名で、まちづくりの学習を丁寧に積み重ねた。平成11年12月に「本能まちづくり委員会」が設立されたが、メンバーを公募したことが大きな特徴である。また、住んでいなくても、土地や建物を持っている人もメンバーになれることとした。初めから、非常にオープンな運営の姿勢を打ち出している。このことは、後々、新たなメンバーが加わる上で効果的であった。マ

ンションの居住者もまちづくり委員会の一員として、その人が持つ得意技を發揮できたのである。

まちづくり委員会の活動内容も肩肘はらない柔らかい仕掛けからスタートしている。「本能のまち再発見」まちあるきツアーでは、「私が気づいたのは」「私がおどろいたのは」のように、一人一人の感性を呼び起こすテーマを設定している。まちづくり委員会の活動で、夏祭りの盆踊りが盛大になり、地域の人と人をつなぎ、地域の人々の関わり合いを深めていった。

地域に深く目が向くようになると、いろんなことが見えてきた。そのひとつが、京染に関わる多様な職人が仕事をしていること、白生地 of 反物から着物が出来る工程のほとんどの職人が暮らし、働いていることであった。平成12年11月には、「おいでやす染めのまち本能」と題して、京染の職人の工房を公開するイベントを行った。初めて公開された工房に多くの市民が訪れ職人の技に驚き、職人は市民の感動する姿に自らの技術を再認識した。

まちづくり委員会は、この後、平成13年8月に「本能まちづくりアンケート」を行い、その結果を生かして地区計画に取り組み、平成14年8月に京都市で2番目の地域協働型地区計画(方針)が都市計画決定された。本能まちづくり委員会の活動は、地区計画をバネにして更に発展した。地区計画の内容をよりわかりやすく伝えるために「本能学区まちづくりのしおり」を作成した。この「しおり」は、地区計画の趣旨をまちづくりに生かすとともに、人々に、私的所有物である個々の敷地や建物も、「まち」という公共空間の構成に大きな影響力を持つことを意識付けている。「しおり」をまちづくり委員会の教科書にし、地域通貨の検討や、和装に関する地域ブランドの構築など



■写真2—おいでやす染めのまち本能のイベント



■図5—まちづくりのしおり



■写真3—マンションの子供たちのための地藏盆で数珠まわしを体験



■写真4—マンションにお住まいの方のための交流園遊会の様子

にも取り組んでいる。当初から、まちづくり委員会はオープンな運営に徹したため、新たな人材が参加しやすく、委員会の活動を様々に支えている。

#### 5——有隣学区のマンションとの共生

修徳学区の東隣に位置する有隣学区の課題は、統廃合された小学校の跡地問題とマンションの住民とのコミュニケーションであった。平成12年10月に自治連合会の役員を中心にまちづくりのコア委員会を立ち上げ、学習を重ねた。いち早く活動していた修徳まちづくり委員会のメンバーの一言が大きな転機となった。「まちづくりは、ハードな問題がすぐ浮かぶが、取り組むうちに、学区民の心を一つにまとめることの大切さがわかった。」これに刺激を受けて平成14年6月に「有隣まちづくり委員会」が発足し、人と人とのつながりを意識したユニークな活動が展開された。

京都には、8月の下旬に「地藏盆」という子供のための祭りがある。ところが、地域とのつながりがないマンションに住んでいる子供たちは参加の機会がない。まちづくり委員会は、マンションとの交流を深めるため、8月に「マンションの子供たちのための地藏盆」を企画し実施した。予想を超える参加者があり、これがきっかけで町内会に入りたいという声も出てきた。マンションの居住者との交流を更に進める取組みは、「マンションにお住まいの方のための交流園遊会」や、マンションの建設に関するマンションマニュアルの策定にまで発展した。

現代のまちづくりは、地域社会の活性化が基盤となり発展していくものである。世帯数が増加してきたマンションとの共生の課題は、京都のどの地域にも共通するものになってきた。豊かな地域社会を築けるかどうかで、町並みの形成への働きかけも変わってくるのではなかろうか。

#### 6——パートナーシップによるまちづくり

上記の3つの事例は、いずれも住民が居住地に誇りを持ち積極的に働きかけることにより、安心して暮らせるまちをつくらうとする活動である。京都で活発に行われている地域活動は、町の資源を地域の個性として認識し、これを生かしたまちづくりを展開する方向に向かっている。また、市民活動団体やNPO団体は、そのミッションの解決のために、地域に目を向け始めている。地域の住民が課題を受けとめなければ、課題はなかなか解決できない。

さらに、企業活動も地域との連携を模索している。京都は中小企業の比率も高いが、地域のニーズに立脚することを、新しいビジネスの発展方向と捕らえる動きが出てきた。事業者と地域住民が協働して地域のまちづくりの文脈に合致する共同住宅を建設した事例もあり、地域と共生することが深く問われる時代になってきた。このように、地域住民に加えて市民活動団体や企業、行政が相互に連携するとともに、自己責任・自己決定するまちづくりの概念が発展しつつある。

まちに関わる全ての人びとが、まちづくりの価値を共有し、お互いに適切な役割を分担し、協働するパートナーシップの関係を構築することが、今後のまちづくりの方向性である。「ひとりひとりが主役のまちづくり」が京都の美しい景観を保全・再生することになる。

※地域協働型地区計画：平成10年4月に京都市が策定した職住共存地区整備ガイドプランに基づき、地域住民が主体となった職と住、新と旧が調和したまちづくりを実現していくため、身近な生活環境の課題に取り組むためにつくられた地区計画制度の積極的な活用を図り、段階的に運用するものであり、第一段階として、地域コミュニティの単位である元学区ごとのまちづくりの目標像を「地区計画の方針」として定めるものです。